

# 日本語動詞連用形への構文論的アプローチ\*

－「動詞連用形」と「連用形名詞」との相関関係を中心に－

蔡盛植\*\*

csshhs@korea.ac.kr

## Contents

1. はじめに
2. 本論
  - 2.2. 連用形名詞の不安定な位相
  - 2.3. 連用形名詞の意味素性
  - 2.4. 連用形名詞と意味的格関係
3. おわりに

## 1. はじめに

本稿は、「日本語動詞の連用形(以下、動詞連用形)」が、その名詞化において示す様々な文法的振る舞いについて、構文論的見地から考察を試みたものである。一般に連用形とは、日本語動詞と形容詞の活用形の一つとされ、各日本語関連辞書では以下のような定義がなされている<sup>1)</sup>。

- (1) a. 文中で文を中止したり、文語では助動詞「き・けり・たり」など、口語では助動詞「た」などを伴ったりし、形容詞の場合には、連用修飾語にも

\* “이 논문은 2012학년도 고려대학교 문과대학 특별연구비에 의하여 수행되었음(과제번호: G1200311, 과제명: 대조언어학적 관점에서 본 일본어동사의 명사화에 관한 일반화의 도출)”

本稿は、高麗大学校文科大學特別研究助成金の研究成果の一部であり、高麗大学校からの研究費の助成を受けている(研究代表者:蔡盛植、課題番号:G1200311、課題名:「対照言語学的観点から見た日本語動詞の名詞化に関する一般化導出」)。

\*\* 高麗大学校日語日文学科、副教授、日本語学

1) 本稿では、連用形のうち、名詞化が見られる、「動詞の連用形」のみに考察対象を限定し、「形容詞の連用形(i.e.①「ク活用」(e.g.なく)、②「シク活用」(e.g.美しく))や「形容動詞の連用形(i.e. ①「ナリ活用」(e.g.静かに)、②「タリ活用」(e.g.堂々たり))」をその対象から除外する。

なる。なお、動詞は、この形を複合のための要素とし、この形で名詞化する。

(『日本国語大辞典』第二版)

- b. 活用形の一。用言につらなるときの形。「咲き散る」の「咲き」、「高く飛ぶ」の「高く」の類。

(『広辞苑』第六版)

- c. 活用形の一つで、用言に続いていく形の活用形。現在では複合動詞とされる「求め歩く」の「求め」などについて、古くは「求め」が用言「歩く」に連なると見て、そう呼んだのである。

(『日本語大辞典』第二版)

連用形に関する上の辞書での定義に共通しているのは、複合動詞(i.e.「v1+v2」)の前項(i.e.「v1」)の位置に現れる動詞の形を主に連用形と呼ぶ、ということである。なお、日本語教育の現場では、尊敬文末表現にあたる「～ます」と共起する際の動詞の形に因んで、「連用形」の代わりに「ます形」と呼ばれたりもする。上の(1)で記した「(動詞)連用形」に関する定義および特徴のうち本稿でとりわけ注目したいのは、以下の二点である。

- (2) a. 用言に続いていく形の活用形。

((1c)からの抜粋)

- b. 動詞は、この形(=連用形)で名詞化する。

((1a)からの抜粋)

まず(2a)の定義は、動詞連用形の構文論的位相を象徴するようなもので、活用形としての構文論的働きや、他用言形式との共起が前提となっていることを示す。一方の(2b)は、動詞連用形の複合語への語形成および他品詞(i.e.名詞)への転化の可能性を示唆するものである。これらを例示すると各々(3a,b)のようである。

- (3) a. 受けに行く／お知らせする／お書きになる など

- b. 受け付け／休み など

他言形式(e.g.「～に行く」「お～する」「お～になる(する)」)を伴わない限り、構文としての整合性を保つことのできぬ動詞連用形((3a)参照)は、その名詞形に至っては、他の体言形式の助けを借りなくとも、そのままの形で一つの独立した構文要素として機能しうる((3b)参照)。このことから、動詞連用形は、「活用形ゆえの動詞としての非自立性」と「名詞としての自立性」といった、一見、相反する素性を兼ね備えた異色の文法範疇として位置づけられよう。ただ、こうした動詞連用形の「名詞としての自立性」というものは、自己完結性<sup>2)</sup>に代表される普通名詞(以下、実質名詞<sup>3)</sup>)のそれには遠く及ばず、このことは以下のような連体修飾節(i.e.「NP1+の+NP2」)の例からも見て取れる。

- (4) a. ロシア文学の作家  
 b. \* 商品の選び

上の(4a,b)は、それぞれ実質名詞の「作家」と連用形名詞の「選び」を含む連体修飾節の許容度の相違を示している。片方の(4b)のみが「『内の関係』ないし『外の関係』」(寺村(1991))に代表される連体修飾節での出現に支障をきたす背景には、実質名詞に相当の「名詞としての自立性」が連用形名詞にのみ欠如していることが影響していると考えられる<sup>4)</sup>。

以下本稿では、「名詞としての転用」ないし「名詞への品詞上の転化」が見られる動詞連用形を「連用形名詞」<sup>5)</sup>と称する。その上で、上述のような「連用形名詞の名詞としての非自立性」は「動詞連用形の動詞としての非自立性」と平行的であるという仮説を立て、その立証のために様々な構文環境における両者の文法的

2) 影山(2010)

3) 本稿では、その意味的な外延(denotation)の設定において追加的な手続きを要せず、自己充足的(ないし自己完結的)な特徴を持つ名詞のことを「実質名詞」と呼ぶ。

4) 以下本稿では、名詞どうしの単なる修飾関係を示す「外の関係」ではなく、連体助詞「の」を挟んで、名詞どうしが意味的な格関係(i.e.主格ないし対格関係)を結ぶ「内の関係」に主な焦点を当てて議論し、詳細については後述する。

e.g. 太郎の子供 → 「太郎」と「子供」とが修飾語と被修飾語の関係 → 「外の関係」

数学の研究 → lit.数学を研究する → 「数学」と「研究」とが対格関係 → 「内の関係」

5) 他に「動詞連用形名詞」(岡村(1995))、「連用形転成名詞」(国広(2002))、「連用形の転用名詞」(沢西(2003))とも呼ばれる。

振る舞いの異同等について論じていく。なお、本稿は、拙稿(2013)に内容・構成的な添削を加えた上で、日本語に書き換えたものであることを予め断っておく。

## 2. 本論

本章では、連用形名詞の構文論的働きを明らかにすべく、まず様々な構文環境の中で当該名詞がどのような形で現れ、かつ、その際、実質名詞とはどのような構文論的・意味論的相違を示すのかについて調べていく。

### 1. 連用形名詞の不安定な位相

生産性(productivity)という観点に立つと、実質名詞の持つ主要な特徴の一つに、高い『複合語の生産性』を挙げることができる。つまり、名詞は他の品詞範疇に比べ、結合の自由度が高く、意味的整合性を保つことのできる範囲内においては、原則上無限に複合語を形成できるのである。下記の(5a-d)は、複数以上の名詞が合わさって一つのまとまった意味を表す複合名詞(i.e.『複合語』)になることを例示したものである。

- (5) a. 株式(NP)+会社(NP) = 株式会社(NP)  
 b. 天気(NP)+予報(NP) = 天気予報(NP)  
 c. 研究(NP)+所(NP) = 研究所(NP)  
 d. 改革(NP)+推進(NP)+委員(NP)+会(NP)=改革推進委員会

このような複合語は、接辞などを用いる派生語とは明確に区別され、複数の語の単なる連なりとしてではなく、それぞれの語が独立した意味機能を維持するとともに、接合部の音変化((6a,b))やアクセントの移動((7a-c))などの音韻論的特徴をも伴うことを、その主な特徴とする。

- (6) a. 株式(かぶしき)+会社(かいしゃ) = 株式会社(かぶしきがいしゃ)  
 b. 研究(けんきゅう)+所(しょ) = 研究所(けんきゅうじょ)
- (7) a. 雨○▼ + 戸● = 雨戸●○○  
 b. 朝○▼ + ご飯●○○ = 朝ご飯●●●○○  
 c. 天気●○○ + 予報○○● = 天気予報●●●○○○<sup>6)</sup>

実質名詞の高い「複合語の生産性」を示唆する、上の(5)~(7)で示した諸例は、連用形名詞の複合語化にも概ね適用され、このことは、以下の実例からも窺える。

- (8) a. 出+入り = 出入り  
 b. 読み+書き = 読み書き  
 c. 問い+合わせ = 問い合わせ  
 d. 組み+合わせ = 組み合わせ
- (9) a. 遠(とお)+吠え(ほえ) = とおぼえる  
 b. 里(さと)+ 帰り(かえり) = さとがえり
- (10) a. 出● + 入り●○ = ・出入り●○○  
 b. 読み○● + 書き●○ = 読み書き○●○○○<sup>7)</sup>  
 c. 雨 ○▼ + 降り●○ = 雨降り○○●○

上の(8)~(10)のように、連用形名詞に関しても、複合語の形成において、その仕組みや意味合い((8))の他に、音変化((9))およびアクセント移動((10))に代表される音韻論的特徴など、実質名詞の複合語化に見られたような様々な言語学的現象が同様に見受けられる。従って、連用形名詞は、実質名詞に極めて類似した名詞としての特徴を有するのみならず、複合名詞、すなわち複合語を形成する上で構文論的制約をさほど受けない、実質名詞相当の「複合語の生産性」を踏襲していると言えよう。

さらに、実際の使用の場面で、連用形名詞は単独での用法より、むしろ上の

6) 「●」は高い音、「○」は低い音、「▼」は下降調のイントネーションを示す。

7) 転成名詞(本稿でいう連用形名詞)が二つ並んでいる場合、しかも対立的な意味を持つ場合には、アクセント核が前項要素のもっとも最後の拍に来る。

(8)~(10)で示したような、複合語の形で用いられることがより一般的である。連用形名詞の単独での出現頻度が複合語の形に比べ著しく落ちる背景には、その原型である連用形の活用形ゆえの不安定な形態的特性と、それを補うための追加的な構文論的手続き履行の必要性が見え隠れしている。一例として、「見る」「着る」のような、日本語の上一段活用動詞は、その活用の際に、語幹部分(i.e. 連用形)が一音節(i.e. 見、着)しか残らず、五段活用動詞(i.e. 読む、書く)との間に、歴然とした形態的・意味的安定性の度合いの差が存在する。よって、次の(11)のように、実際の用言形式としての用法に連用形による容認度の差が生まれるのである。

- (11) a. \* お見になる。(cf. ご覧になる)  
 b. \* お着になる。(cf. お召しになる)  
 c. お読みになる。  
 d. お書きになる。

(11a-d)は、敬語の用言形式にあたる「お~になる」と各連用形との共起関係を例示したもので、その容認度判断が示すように、上一段動詞の連用形((11a,b))のみが却下されており、他の用言形式との共起のいかんを問わず、一音節連用形については、その使用に相当な構文論的制限が加わるのである。

こうした動詞連用形の形態的・意味的不安定性は、連用形名詞への名詞化にも少なからぬ影響を及ぼす蓋然性が高いと考えられる。そこで一つの可能性として、動詞連用形は、その名詞化の過程において、元になる動詞(以下、「元動詞」と称する)の有する意味素性(i.e. 意味的外延)を十全に引き継ぐことができず、それを補うための追加的な措置、すなわち、不完全な意味的外延を補うための新たな「パラメーター(i.e. 変数)の設定」が不可欠だと仮定してみる。次の(12)は、連用形名詞の不完全な意味的外延を指摘するとともに、他名詞との共起による複合語の形成が、連用形名詞にとって一種の「パラメーターの設定」の役割を果たすことを示している。

- (12) a. \* 見を楽しみにしている。  
 b. \* 月の見を楽しみにしている。  
 c. 月見(つきみ)を楽しみにしている。

上の(12)は、連用形名詞の「見」の場合、単独および連体修飾節での出現が許容されない反面、他名詞(i.e.「月」)と結合した複合語の形では構文全体の整合性が保たれていることを示す。このことから、連用形名詞「見」は、追加的な意味的外延の設定を必要とせずそれ自体で自己完結的な実質名詞とは違って、名詞としての地位を確保するには、他の名詞との共起(しかも複合語としての使用)が義務づけられると言える。他の名詞類に比べ連用形名詞に限って複合語としての使用が顕著なのは、こうした連用形名詞ならではの「不完全な自立性」が影響していると考えられる。この詳細については後述する。

また、連用形名詞は、「実質名詞+連用形名詞」((12c))の他に、次の(13a-c)に示すような、前項動詞(「V1」)と後項動詞(「V2」)の結合からなる複合動詞(「V1+V2」)の名詞形として、「連用形名詞+連用形名詞」の形を取ることも多い。

- (13) a. 問い+合わせ = 問い合わせ  
 b. 組み+合わせ = 組み合わせ  
 c. 組み+立て = 組み立て

動詞の連用形が決まって前項の位置に現れる日本語複合動詞の形態的特徴からして、その連用形名詞は、必然的に「連用形名詞+連用形名詞」の形を取るようになる。そのため、複合動詞の連用形名詞は、それ自体で複合語としての位相が認められることとなり、単独動詞から派生した連用形名詞(e.g.歩き、吠え、集め)とは違って、連体助詞「の」を伴った連体修飾節での使用にも特に問題は生じない。

- (14) a. 色の組み合わせがいい。  
 b. 部品の組み立てに相当時間がかかってしまった。

ところで、ここで一つ留意すべきは、連用形名詞の単独での使用が、いかなる場面(または構文環境)においても禁じられるわけではなく、次節で詳しく論じるように、元動詞の持つ典型的意味素性(i.e.「動詞+こと」の意味<sup>8)</sup>)から逸脱した意味(i.e.「意味転化」)を表す時には、格助詞を伴った単独での使用が許されることである。

- (15) a. 今日の太郎の歩きは変だ。  
       → 「意味転化」(「歩き」=[歩き方])  
       b. 彼は泳ぎが下手だ。  
       → 「意味転化」(「泳ぎ」=[水泳])  
       c. 読みが完全に間違っている。  
       → 「意味転化」(「読み」=[理解・状況把握])

だが、上の(15a-c)のように、「様態の意味」や「意味転化」といった特殊な環境のもとでしか連用形名詞の単独および連体修飾節での出現が認められないということは、裏返しに言えば、当該名詞の不安定な名詞としての位相を物語っているとも言えよう。

## 2. 連用形名詞の意味素性

本節では、前節で述べた連用形名詞の意味素性について更なる考察を加えることで、それと当該名詞の構文論的働きとでどのような相関関係が存在するのかを追求する。前節の(14)に登場した連用形名詞を、元動詞の持つ典型的な意味素性(i.e.[動詞+こと]の意味)に置き換え、構文全体を次の(16)のように再構成してみると、その容認度に変化が見られるようになる。

- (16) a. \* 今日の太郎の歩くことは変だ。  
       b. 彼は泳ぐことが得意だ。  
       c. \* 読むことが完全に間違っている。

8) 動詞の表す動作性に焦点が当てられた意味のことを指し、詳しくは岡村(1995)を参照されたい。



(16a,c)にのみ容認度の低下が顕著に見られることは、連用形名詞「歩き」と「読み」が、元動詞「歩く」と「読む」の持つ典型的意味素性(i.e.[歩くこと][読むこと])から逸脱した、周辺の意味素性に転じていることを示唆する。ここでいう周辺の意味素性とは、「動詞+こと」の意味とは直接かかわらない、「様態の意味」<sup>9)</sup>や「連想による意味の拡張」といった「意味転化」のことを指すのである。

- (17) a. 今日の太郎の歩きは変だ。  
 (lit.歩き方=様態の意味)
- b. 読みが完全に間違っている。  
 (lit.(雰囲気や内容)を理解する=意味の拡張)

まず(17a)の「歩き」は、属性を表す形容動詞「変(だ)」との整合性を保つためにも、動作そのものの意味(i.e.[歩くこと])ではなく、その動作が行われる様子、つまり様態の意味(i.e.[歩き方])で解釈されなければならない。一方の(17b)をめぐっては、「読み」が「文字や文を読み上げる」という、いわば物理的な[reading]の意味ではなく、「状況や雰囲気、隠れた意図(本意)を読み取る」といった、いわば抽象的な[literacy]または[understanding]の意味をなすものとみるのが妥当であろう。

このように、連用形名詞は、単独使用の場面で元動詞の持つ典型的な意味素性から逸脱した、周辺の意味素性を表す傾向にあるが、このような傾向は、とりわけ自動詞派生の連用形名詞と他動詞派生のそれとを対比することによってより鮮明に浮き彫りとなる。

一般に他動詞派生の連用形名詞は、自動詞派生のそれに比べ、単独使用や連体修飾節での使用に制限が加わりやすく、次の(18)と(19)の対比に見るように、複合語としての用法を除けばその相違は明らかである。

- (18) 自動詞派生の連用形名詞
- a. 今日は歩きですか。

9) 「動作・動き・作用のさま」(岡村(1995))

b. 太郎の歩きは変だ。

c. 一人歩き

(19) 他動詞派生の連用形名詞

a. \* 集めが計画通りに行かない。

b. \* 資金の集めが計画通りに行かない。

c. 資金集めが計画通りに行かない。

(18)の自動詞派生の連用形名詞「歩き」は、既述の通り、元動詞の持つ典型的意味素性から逸脱した周辺の意味素性のうち「様態の意味」を表す。この場合、その意味論的特徴(i.e.典型的意味素性か周辺の意味素性か)はさておき構文論的観点にのみ絞って考えると、(18a-c)で示したように、その構文環境(i.e.格助詞を伴った単独使用や連体修飾節での使用、複合語としての使用など)に関わりなく、当該名詞を含む構文全体の整合性は一応保たれる。それに対し、(19)の他動詞派生の連用形名詞「集め」は、単独および連体修飾節での使用が容易ではなく、なお自動詞派生の連用形名詞によく見られるような、典型的意味素性から周辺の意味素性への「意味転化」が生じるとも言い難い。よって、「集め」のような他動詞派生の連用形名詞は、「名詞としての自立性」という点で、「歩き」「走り」のような自動詞派生の連用形名詞に遠く及ばないのである。

ただ、ここで一つ気をつけなければならないのは、同じ他動詞派生の連用形名詞の中でも、前に言及した、「読み」のような類のものは、単独での使用に支障を来さない点である。

(20) a. \* 集めが計画通りに行かない。

b. 読みが完全に間違っている。

「集め」と「読み」は、両方ともにその元動詞が対格を取る他動詞であるという点では共通するものの、(20b)の「読み」に限っては、上述のごとく、元動詞の持つ典型的意味素性から逸脱した、「意味拡張による意味転化」(i.e.物理的な[reading]→抽象的な[literacy]ないし[understanding])を通じて「名詞としての自立性」が飛躍的に向上し、その結果、格助詞を伴った単独での使用が可能とな

るのである。こうした「読み」の「名詞としての自立性」の向上は、単独使用の場面にとどまらず、連体修飾節での自由な使用にもつながり、(20a)の「集め」の類とは一線を画する。

- (21) a. 事態の読みが甘い。  
 b. 地の文の読みが間違っている。  
 c. 資金の集めが難航している。

以上を通して、同じ連用形名詞同士でさえも、動詞の自他や種類による相違が原因でその名詞化の度合い(i.e.名詞としての自立性)に差が生じ、つまるところ構文内におけるその文法的振る舞いや構文論的特徴に至っても歴然とした違いが見られることが明らかとなった。以下本稿では、それぞれの連用形名詞が異なる構文論的特徴を示す主な要因について、寺村(1991)の「意味的格関係(semantic case-relationship)」と名詞の「意味的外延(semantic denotation)」とを関連づけて議論する。

### 3. 連用形名詞と意味的格関係

「自己完結性」に代表される実質名詞は、動詞とは違って、内項や外項を問わず、原則的に項を取らないため、統語論的には他の構文要素と格関係を結ぶことは許されない。ところが、連体修飾節(「NP1+の+NP2」)の修飾部(i.e.「NP1」)と被修飾部(i.e.「NP2」、主要部)の位置に動作性を持つ名詞(e.g.動詞的名詞<sup>10)</sup>)が見られた場合、その意味解釈上、それと共に起する名詞との間に「意味的な格関係(e.g.主格ないし対格関係)」が成立するとされる(寺村(1991)参照)。

- (22) a. 味方の敗退  
 (lit.味方が敗退する(主格関係))

10) 補助動詞「する」を後接させ「サ行動詞」を形成する「漢語名詞(主に二字漢語名詞)」のことを指し、一般に「動詞的名詞」(寺村(1994))、「名詞述語」(南(1993))、「動詞性名詞」(井上・金(1998))、VN(Verbal Noun)とも呼ばれる。

- b. 数学の研究  
(lit.数学を研究する(対格関係))
- c. 夢の実現  
(lit.夢が実現する(主格関係) or 夢を実現する(対格関係))
- d. 議論の成立  
(lit.議論が成立する(主格関係) or 議論を成立する(対格関係))

(22a-d)の動詞的名詞「敗退」「研究」「実現」「成立」は、その「サ行動詞」にあたる「敗退する」「研究する」「実現する」「成立する」の有する語彙項目(lexicon)のうち格素性(case feature、厳密に言えば、格付与(case-marking)能力)を継承しており、各々の共起要素である「味方」「数学」「夢」「議論」との間に動詞での統語的格関係に似た「意味的格関係」を想定することができる。こうした「意味的格関係」は、動詞的名詞に限らず、動詞派生の名詞であるがゆえに動詞との密接なかかわりが認められる連用形名詞でもよく観察される。

- (23) a. 一人歩き  
(lit.一人で歩く=一人が歩く=主格関係)
- b. 資金集め  
(lit.資金を集める=対格関係)
- c. 地の文の読みが間違っている。  
(lit.地の文を読む=対格関係)

(23a-c)の「歩き」「集め」「読み」が、それぞれ「一人」「資金」「地の文」と「意味的格関係」に置かれていることを、その意味解釈の過程をもって確認することができる。しかしながら、連用形名詞と共起要素とが、あらゆる場面において、こうした意味的格関係を結ぶとは限らない。例えば、上記の「集め」のような他動詞派生の連用形名詞が連体修飾節に登場した次の(24a)がそれに該当する。

- (24) a. \* 資金の集めが計画通りに行かない。
- b. 資金集めが計画通りに行かない。

連用形名詞「集め」は、(24b)のように、複合語として用いられた場合には共起要素との間に意味的格関係が認められる反面、(24a)の容認度判断からも明らかのように、連体修飾節での使用は許容されない。動詞との密接なかかわりを持つ名詞類という点では、連用形名詞と動詞的名詞は多くの類似性や共通性を共有するものの、実際には以下の例が示すように、その構文論的振る舞いに関しては異なる傾向を見せるのである。

- (25) a. 夢の実現に役立つパートナー  
 b. \* 商品の選びに相当苦勞する。  
 c. 夢実現に役立つパートナー  
 d. 商品選びに相当苦勞する。

上の(25a-d)で見ると、動詞的名詞である「実現」は、構文全体の容認度判断からして、連体修飾節や複合語といった構文形式にかかわらず、共起要素(i.e.「夢」)と意味的格関係で結ばれているのが分かる。それに対し、連用形名詞である「選び」の場合、構文形式の種類(i.e.連体修飾節か複合語か)によって、意味的格関係成立の可否が決まるのである。さらに、両名詞類が決定的に異なる文法的な振る舞いを示す構文形式が、他でもなく、連体修飾節であることも(25a,b)の対比をもって確認できる。本稿では、こうした相違を生む可能性のある要因を、動詞的名詞と連用形名詞とにおける「意味的外延」の相違と、それに起因する「名詞としての自立性」の度合いの差に求めることとする。

自己完結性をその主要な特徴とする実質名詞は、共起要素と直接、統語的格関係を結ぶことはできない。だが、複合語ないし連体修飾節といった構文形式では共起要素との意味的格関係を認めるべきなのは周知の通りである。つまり、このような構文形式は、言い換えれば、名詞と共起要素とが意味的格関係を結ぶ上で欠かせない、必須要素でありつつ、格関係の成立を手助けする、一種の構文論的操作であるとも言える。

ただ、その際の整合性というのは、連用形名詞の「名詞としての自立性」の度合いにより大きく変動しかねない。連体修飾節(「NP1」+の+「NP2」)の場合、

「NP1」と「NP2」が連体助詞「の」を挟んで修飾部と被修飾部の形を取っているため、名詞と名詞が連続し結合している複合語に比べ、「構文論的結束性 (cohesion、以下「結束性」)」は比較的劣るとしか言わざるを得ない。結束性の足りない連体修飾節が構文論的に成り立つためには、「NP2」に立つ名詞に、追加的な外延の設定が不必要なほどの、「名詞としての自立性(主に意味的側面の自立性)」が、いつにもまして、より厳格に求められる。

一方、連体修飾節での使用に支障のない動詞的名詞は、共起要素に(意味的ではあるにせよ)格を与えられる能力(i.e.格付与能力)をその意味的外延の中にすでに含んでいるため、意味的格関係成立のための追加的な外延設定(i.e.パラメータの設定)の不必要な「名詞としての自立性」が認められるのである。

それに対し、「集め」のような他動詞派生の連用形名詞に関しても、その複合語(i.e.資金集め)で観察されたような意味的格関係の成立からも分かるように、一定の「格付与能力」は認められる。ただ、この場合における「格付与能力」というのは、あくまでも共起要素との強い結束性が保証される複合語の形でしか認められない限定的なものに過ぎず、結束性の比較的弱い連体修飾節においてはほぼ機能しない。というのは、当該名詞類の格付与能力は、不完全な意味的外延を補うための追加的なパラメータとして働く「共起要素の存在」と、それとの直接的な結合が保証される「構文形式の存在(i.e.複合語の形式)」、といった二つの条件が同時に揃ってはじめて機能するのである。

最後に、「集め」「選び」のような他動詞派生の連用形名詞に対して、「名詞としての自立性」を飛躍的に向上させ、連体修飾節での使用を可能にする一つの方法として美化語「お」の使用を指摘したい。

- (26) a. \* 商品の選びに苦労する。  
 b. 商品のお選びに迷われた際は、お気軽にお申し付けください。

(26a)は、既述のように、不完全な格付与能力を持つがゆえに連体修飾節での使用が許容されない「選び」を例示したものであるが、美化語「お」を伴った(24b)は実生活の場で敬語表現としてごく普通に使われるほど一般的な構文である。

美化語「お」は、相手(ないし相手の領域に属する者や所有物など)を高めるために用いる典型的な敬語表現の一つであるため、その使用に際し、先に、敬意の対象となる、動作・行為の行い手、すなわち「主体」を特定しなければならない。その主体とは、話し手(i.e.自分)より社会的な身分ないし年齢などが上の相手に他ならず、連用形名詞と結合する際の美化語「お」は、一種の「主語」のような機能を担っていると見て差し支えないであろう。ゆえに、この場合の連体修飾節は、主体と対象(i.e.客体)を兼ね備えた対格構文に近く、元動詞の典型的意味素性(i.e.[動詞+こと]の意味)を受け継ぐ可能性が高まり、それにつれて共起要素との間で意味的格関係が成立するに至るのである。換言すれば、美化語「お」の使用を通じて主体を特定していく過程こそが、連用形名詞(他動詞派生の連用形名詞)の不完全な意味的外延を補うための追加的パラメーターの設定であると言えるよう。

(27) 商品のお選びに迷われた際は...

→ lit. 「お」によって特定された行為の行い手(主語)が商品を選ぶことに迷われた際は...

→ 対格構文

→ 「商品」と「お選び」が対格関係(意味的格関係)

結局、連体修飾節における「美化語『お』と連用形名詞の結合」と、先述の「連用形名詞の複合語としての用法」は、連用形名詞の不完全な意味的格付与能力を補填することによって、その「名詞としての自立性」を向上させ、構文全体の整合性をもたせるための一種の構文論的措置として働くという点で一致する。

(28) a. \* 商品の選びに相当苦勞する。

b. 商品選びに相当苦勞する。 (複合語としての用法)

c. 商品のお選びに迷われた際は、お気軽にお申し付けください。

(美化語『お』の使用)

### 3. おわりに

以上本稿では、動詞連用形の名詞形にあたる「連用形名詞」を対象とし、多様な構文形式におけるその文法的振る舞いについて考察を試みた。その結果をまとめると以下のものである。

- (29) a. 連用形名詞は、元動詞の種類(i.e.自他動詞)により「名詞としての自立性」の度合いに差が見られる。
- b. こうした度合いの差は、特定の構文形式における連用形名詞の文法的振る舞いに影響する。
- c. とりわけ他動詞派生の連用形名詞(e.g.集め、選び)は、その使用に際し、名詞としての自立性が強く求められる連体修飾節での使用(e.g.\*資金の集め)に制限が加わりやすい。
- d. ただし、共起要素どうしの構文論的結束性の強い複合語(e.g.資金集め)としては生産性が高い。
- e. 連体修飾節における「美化語『お』と連用形名詞の結合」(e.g.商品のお選び)は、敬意の対象となる、動作・行為の行い手、いわば「主体」の特定を可能にする。それによって、連体修飾節における連用形名詞は、(意味的ではあるが)共起要素への格付与が可能なほどの「名詞としての自立性」を確保でき、その結果、連体修飾節の構文としての整合性は高まるのである。
- f. 連体修飾節における「美化語『お』と連用形名詞の結合」と、「連用形名詞の複合語としての用法」は、類似した側面を持つ。

最後に、今後の課題として、紙面の都合上、本稿では扱うことのできなかった、多様な用例、例えば、次の(30d')のように、連用形名詞の複合語の形が連体修飾節に登場した際のその構文論的・意味論的特徴などにまで考察の幅を広げ、この類の連用形名詞の単独用法の成立可否と、その際の意味転化((30c))および名詞化される前の構文形式((30a-b))との相関関係をも調べていきたい。

- (30) a. 風疹の感染予防を心がけましょう。



- b. インフルエンザの予防に心がけましょう。
- c. 心がけがいい。
- d. \* 交通安全を心をかけましょう。
- d'. 交通安全の心がけをお願いします。



## 참고문헌

- 井上優・金河守(1998) 「名詞述語の動詞性・形容詞性に関する覚え書き-日本語と韓国語の場合-」, 『東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究報告書』, 筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究組織, pp.455-470.
- 岡村正章(1995) 「典型的な動詞連用形名詞」に関する考察, 『上智大学国文学論集』, 上智大学, pp.73-89.
- 影山太郎(2010) 「連用形名詞の新用法は異常か」, 『言語』39-1, 明治書院, pp.16-23.
- 金田一春彦(1976) 『日本語動詞のアスペクト』, むぎ書房.
- 国広哲弥(2002) 「連用形名詞の新用法は異常か」, 『言語』39-1, 大修館書店, pp.74-77.
- 沢西稔子(2003) 「動詞・連用形の性質」, 『日本語・日本文化』, 大阪大学
- 谷口秀治(2007) 「動詞的な言い方と名詞的な言い方」, 『大分大学国際教育センター紀要』1, 大分大学, pp.61-70.
- 寺村秀夫(1975-1978) 「連体修飾のシンタクスと意味 その1~その4」, 『日本語・日本文化』4~7, 大阪外国語大学留学生別科.
- \_\_\_\_\_ (1991) 『日本語のシンタクスと意味III』, くろしお出版.
- 坪本篤朗(1998) 「文連結の形と意味と語用論」, 赤塚紀子・坪本篤朗(共著) 『モダリティと発話行為』, 研究社出版.
- \_\_\_\_\_ (1999) 「モノとコトから見た文法—主要部内在型関係節とト書き連鎖—」, 『日本語学』19, 明治書院, pp.26-40.
- 沈晨(2013) 「日本語連用形名詞の自立性の段階について」, 『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, 国立国語研究所, pp.151-158.
- 蔡盛植(2009) 「<名詞>に潜在する<動詞性>について—<動詞的名詞>を含む連体修飾表現を中心に—」 『日本語学』43, 韓国日本語学会, pp.207-231.
- \_\_\_\_\_ (2010a) 「日本語 名詞表現을 통해 본 名詞의 動詞性-<動詞的名詞>와 <連用形名詞>를 中心으로-」, 『日本研究』13, 고려대학교 일본연구센터, pp.291-310.
- \_\_\_\_\_ (2010b) 「日本語の動詞連用形名詞に関する一考察」, 『日本文化研究』36, 東アジア日本学会, pp.487-509.
- \_\_\_\_\_ (2011) 「일본어동사의 명사화와 <이벤트성>에 관하여」, 『日本研究』15, 고려대학교 일본연구센터, pp.223-240.
- \_\_\_\_\_ (2013) 「日本語動詞派生名詞에 대한 文法的 接近」, 『日本学報』97, 韓国日本学会, pp.71-82.
- 西尾寅弥(1961) 「動詞連用形の名詞化に関する一考察」, 『国語学』, 明治書院, pp.60-81.
- 西山佑司(1993) 「NP1のNP2」と「NP2 of NP1」, 『日本語学』10-12, 明治書院, pp.65-71.
- \_\_\_\_\_ (2010) 「名詞句研究の現状と展望」 『日本語学』29-11, 明治書院, pp.4-14.
- 南不二男(1993) 『現代日本語文法の輪郭』, 大修館書店.

<辞書>

『広辞苑』(2008), 第六版, 岩波書店.

『日本国語大事典』(2000), 第二版, 小学館.

『日本語大事典』(1995), 第二版, 講談社.

❖ 투고일 : 2013.12.31

❖ 심사완료일 : 2014.02.07

❖ 게재확정일 : 2014.02.10



## Abstract

日本語動詞連用形への構文論的アプローチ  
 - 「動詞連用形」と「連用形名詞」との相関関係を中心に -

蔡盛植

本稿は、日本語動詞の連用形が、その名詞化において示す様々な文法的振る舞いについて、構文論的見地から考察を試みたものである。一般に連用形とは、日本語動詞と形容詞の活用形の一つとされ、その特性上、他の用言形式への依存度が極めて高く、様々な用言形式との共起を通じてはじめてその文法的機能を遂行できるようになる(e.g. お書きになる、受けに行く)。とりわけ本稿での主な分析対象である動詞の連用形(以下、動詞連用形)に限っては、そのままの形で「名詞への転化」が可能(i.e.「連用形名詞」)なため、構文環境に応じて、「用言としての用法」と「体言としての用法」とを区別し分析することが求められる。「動詞連用形」の名詞形にあたる「連用形名詞」は、その名称からも明らかのように、名詞の一種であるため、他の名詞類と変わらぬ特徴を有することが予想されるものの、実際の使用の場面(e.g. 単独用法、連体修飾節での用法など)では様々な構文論的制約が加わり(e.g. \*集めがいい、\*資金の集めが悪い)、自己関係性に代表される普通の名詞(i.e. 実質名詞)とはその性格を異にする。本稿では、連用形名詞と実質名詞とでこうした相違が見られる背景に、動詞連用形の活用形ゆえの不完全な「動詞としての自立性」に起因する、連用形名詞の「名詞としての不完全な自立性」が存在すると想定し、その解明に向け、様々な構文環境における連用形名詞の文法的振る舞いを調べた。なお、その不完全な自立性を補強するために講ずべき様々な構文論的措置についても分析を進め、連用形名詞を含んだ多様な構文形式の諸相を考察した。その結果、以下の諸点が明らかになった。①連用形名詞は、元になる動詞(i.e. 自他動詞)により、「名詞としての自立性」の度合いに差が見られる。②こうした度合いの差は、特定の構文形式における連用形名詞の文法的振る舞いに影響する。③とりわけ他動詞派生の連用形名詞は、その使用に際し、名詞としての自立性が強く求められる連体修飾節での使用に制限が加わりやすい。④ただし、共起要素どうしの構文論的結束性の強い複合語としては生産性が高い。⑤連体修飾節における「美化語『お』と連用形名詞の結合」(e.g. 商品のお選び)は、敬意の対象となる、動作・行為の行い手、いわば「主体」の特定を可能にする。それによって、連体修飾節における連用形名詞は、(意味的ではあるが)

共起要素への格付与が可能なほどの「名詞としての自立性」を確保でき、その結果、連体修飾節の構文としての整合性は高まるのである。⑥連体修飾節における「美化語『お』と連用形名詞の結合」と、「連用形名詞の複合語としての用法」は、類似した側面を持つ。

**Key Words** : 連用形(infinitive-derived form), 連用形名詞(Japanese Infinitive-derived Nouns), 動詞的名詞(Verbal Nouns), 意味的格関係(semantic case-relationship), 外延(denotation)

